

## 戒・定・慧 三學の修行方法

崔 鍾 男

1. はじめに 煩惱を滅ぼして悟りを得る修行方法は、佛典の中に數多く説かれている。それらの中には、ブッダが比丘達を對象にして舍衛國祈樹給孤獨園<sup>1)</sup>、跋耆聚落、菴婆羅村、竹園、拘利村等の地で説かれた戒・定・慧の三學がある。

三學の修行方法は『瑜伽師地論』『聲聞地』にあるように、佛教にのみあつて外道にはない修行方法である。

この〔三〕學は聖なる教え（＝佛の教え）だけにある。その〔三學は〕外道達と共に実践されることはない<sup>2)</sup>。

雜阿含經にある『學經』の中には、三學は比丘達において正しい修行方法であるとして、これらを勤勉に修行することを、次のように勧めている。

三學を具足すれば、これは比丘の正行である。〔故に〕増上の戒・定・慧の三つの法を勤勉に精進すべきである<sup>3)</sup>。

しかし諸比丘が三學を修行しないならば、彼等は實に比丘ではないと同經<sup>4)</sup>で説かれている。

このように三學は比丘達に於て必ず實踐されなければならない修行方法の一つである。

三學については、阿含經、律藏、部派佛典、大乘佛典等に多く説かれているが、ブッダにおける三學の修行方法については、初期佛典である五部ニカーヤでは大部分の比丘と阿難に、大乘佛典では大梵天王と大仙等に説かれたとされている。

しかし『解脫道論』『因緣品』<sup>5)</sup>では五部ニカーヤと大乘佛典等の記録とは違い、戒・定・慧の三學を對象の根機に合わせて、戒は鈍根の人、定は中根の人、慧は利根の人のためにそれぞれに分けて説かれたと記している。

また、三學の修行方法については、たとえば雜阿含經（卷 29）には、戒の修行としては戒を受持し、定の修行としては四禪を具足し、慧の修行としては四聖諦を眞に知ることであると説かれている。この修行方法は、部派佛典と大乘佛典等にも述べられている。しかし一部の部派佛典と大乘佛典には、三學の修行方法と

して八正道と六波羅蜜等が述べられている。

そこで、本研究では、こうした三學の修行方法が時代的・學派的にはどのように説かれているのか、その相違点を關係典籍の内容を分析して比較・検討する。また三學修行の障礙になる要因、三學修行によって得られる階位・果報についても考察する。

**2. 三學の修行方法** 三學は佛教の根本教學がある程度完成された以後、一つの修行體制として他の教學と連繫して成立した修行方法である。

三學の修行は、戒・定・慧を前後の順序によって漸進的で、直線的に修行することが各三藏で説かれている。しかし戒・定・慧を實踐修行する場合の修行方法については、各三學では少しずつ違うように説かれている。三學の修行方法としては大きく三つの種類に別けることができる。

a) 初期佛典である雜阿含經<sup>6)</sup>、部派の有部論書である『阿毘達磨集異門足論』<sup>7)</sup>、律藏の『摩訶僧祇律』<sup>8)</sup>、そして大乘佛典である『瑜伽師地論』「聲聞地第十三第二瑜伽處之三」<sup>9)</sup>と『顯揚聖教論』<sup>10)</sup>等では戒(=増上戒學)の修行としては戒を具足して別解脱律儀を守護することを、定(=増上意(心)學)の修行としては四禪の實踐修行を、慧(=増上慧學)の修行としては四聖諦を如實に分かる實踐修行を説かれている。

b) 中阿含經の『法樂比丘尼經』<sup>11)</sup>、『解脱道論』「因緣品」<sup>12)</sup>、『瑜伽師地論』「本地分中間所成地第十之三」<sup>13)</sup>、そして『大乘義章』<sup>14)</sup>等では三學の修行を八正道の八つの徳目の意味に合わせてそれぞれ分類して説かれている。

しかし經・論の内容をお互いに對照して見ると、一部の徳目において異説がある。『法樂比丘尼經』と『瑜伽師地論』では、戒は正語、正業、正命の實踐修行、定は正念、正定の實踐修行、慧は正見、正思惟、正精進の實踐修行であると説かれているが、一方、『解脱道論』では正精進を定の實踐修行であると説き、『大乘義章』では正精進は三學のどの所にでも當たる實踐修行として説かれている。

c) 大乘の瑜伽行派論書である『解深密經』<sup>15)</sup>、『瑜伽師地論』「菩薩地」<sup>16)</sup>、そして『大乘莊嚴經論』<sup>17)</sup>等では、戒・定・慧の三學の修行は六波羅蜜の實踐徳目と連繫して述べられている。

『解深密經』と『大乘莊嚴經論』では戒の實踐修行として布施、持戒、忍辱を、定の實踐修行としては禪定を、慧の實踐修行としては智慧を、そして六波羅蜜の中の精進は三學全體をあまねく實踐修行することとして述べられている。しかし

『瑜伽師地論』『菩薩地』では、六波羅蜜の中の精進は戒の實踐修行徳目に含まれている。

『成唯識論』<sup>18)</sup>では三學の修行は十波羅蜜として述べられている。戒の實踐修行としては布施、持戒、忍辱を、定の實踐修行としては禪定を、慧の實踐修行としては智慧、方便、願、力、智を、そして残る精進は『解深密經』と同じように三學をあまねく實踐修行することとされている。

以上のように、原始佛教時代から大乘佛教時代までの經・律・論では、三學の修行方法は大きく三つの種類において説かれている。

初期佛典と部派佛典では三學の實踐修行を教學的な内容と連繫して、體系的で段階的に組織し、そして大乘佛典では大乘思想に立脚して、菩薩道の實現として三學の實踐修行に重點を置いている。

『瑜伽師地論』では上記の三つの修行方法がすべて述べられている。しかし三つの修行方法が述べられている五分十七地の中の「聞所成地」、「聲聞地」、「菩薩地」の内容を見ると、同論では三つの修行方法が、それぞれの地（Bhūmi）の内容展開に合わせて述べられている。

**3. 三學の修行障** 三學の修行障に對しては『解脫道論』の「分別戒品」、「分別定品」と『瑜伽師地論』の「攝事分」でそれぞれ述べられている。『解脫道論』の兩品では戒・定・慧の三學の中で戒と定の修行障に對してのみ述べられている。戒の修行障としては34法<sup>19)</sup>で‘忿・惱・覆・熱・慳・嫉・幻・諂・恨・競・慢・増上慢・傲慢・放逸・懶惰・貪欲・不知足・不從智・不正念・惡口・惡友・惡智・惡見・不忍・不信・無慙・無愧・營身口味・狎俗・親近女人・不敬師・學不攝諸根・於食不節・初夜後夜墮不禪誦’を、定の修行障としては8法<sup>20)</sup>で‘欲欲・瞋恚・懈怠・睡眠・調戲・疑惑・無明・無喜樂’を障の法數として上げられている。

『瑜伽師地論』<sup>21)</sup>では戒の修行障として‘無慚・無愧’が、定の修行障としては‘昏沈・睡眠’が、慧の修行障としては‘悼擧惡作’が、たびたび現われて實踐修行を障する要因として上げられている。

兩論書では、それぞれの法數は違うが、これらの中のどれかの一つがあれば、三學修行が成り立つことはできないと述べられている<sup>22)</sup>。

**4. 三學修行によって得られる階位・果報** 三藏では、三學の修行によって得られ

る階位が大きく三つの種類(四沙門果, 十地, 心慧解脱)において説かれている。

a) 雜阿含經, 『四分律』, 『解脱道論』, 『清淨道論』等では三學の實踐修行によって得られる階位を四沙門果で説いている。

雜阿含經 No.820 と No.822<sup>23)</sup> では, 戒の修行によって三結(身見・戒取・疑)を斷てば須陀洹果を, 定の修行によって五下分結(身見・戒取・疑・貪欲・瞋恚)を斷てば阿那含果を, そして慧の修行によって三漏(欲漏・有漏・無明漏)から脱すれば悟りを得て後有がないことが説かれている。

『四分律』<sup>24)</sup>, 『解脱道論』<sup>25)</sup>, 『清淨道論』<sup>26)</sup> の中では, 戒の修行によって須陀洹果と斯陀含果を, 定の修行によって阿那含果を, そして慧の修行によって阿羅漢果を得ることができると述べられている。

b) 『解深密經』<sup>27)</sup> と 『瑜伽師地論』「菩薩地」<sup>28)</sup> では, 三學の修行によって得られる階位は菩薩の修行階位である 42 位中の十地に分類して述べられている。兩論書では戒の修行によって二地である離垢地に, 定の修行によって三地である發光地に, そして慧の修行によって四地である焰慧地にとどまることが述べられている。

c) 『成實論』「止觀品」<sup>29)</sup> では三學の修行によって得られる段階を心・慧解脱で區分している。戒と定の修行によって心解脱を, そして慧の修行によって慧解脱を得ることができると述べられている。

次に, 三學の修行によって得られる果報としては, 有部の律藏である『根本說一切有部毘奈耶雜事』<sup>30)</sup> と中國禪宗の撰述書である『小室六門』<sup>31)</sup>, 『六祖大師法寶壇經』<sup>32)</sup> 等では, 三毒を例に上げて述べられている。一切煩惱と一切惡の根本である貪・瞋・癡の三毒<sup>33)</sup> は, 戒の修行によって貪を, 定の修行によって瞋を, 慧の修行によって癡を對治して悟りを得ることが述べられている。

5. 終わりに 以上, ブッダによって提示された煩惱を滅ぼして悟りを得る修行方法としての三學について, 三藏および中國の撰述書等を中心として考察した。

三學は佛教の教學が定着された後に成立した一つの修行體制である。三學は五部ニカーヤの中の雜阿含經で特に多く説かれている。雜阿含經に記録されている三學に對する内容を見ると, ブッダが説かれた場所及び對象が, 多様さと共に三學に對する修行方法, 體制もまたさまざまな類型で組織されている。また律藏, 部派佛典及び大乘佛典等においても, 三學の修行方法と階位等についての異説が提示されている。

すなわち、初期佛典では三學の修行方法を多くの教學と連繫して對象の根機に合わせて、また律藏、部派佛典及び大乘佛典等では時代と學派の教學に合わせて三學の修行方法・修行障礙・階位等を體系化したために、さまざまな異見が提示されることになったものである。従って、一部の大乘佛典では初期佛典が傳えている戒・定・慧の三學の要素とは異なった内容が傳えられている。

〈紙面の都合上、注はすべて省略。本稿の注については執筆者に直接お問い合わせ下されば、お送りします。〉

〈キーワード〉 別解脱律儀、四禪、四聖諦、八正道、六波羅蜜、四沙門果、十地。  
(中央僧伽大學兼任教授、哲博)

#### 新刊案内

財団法人 仏教伝道協会 英訳大蔵經翻訳叢書

#### ZEN TEXTS

- i) *Essentials of the Transmission of Mind* (黄檗山斷際禪師傳心法要)  
Translated by John McRae
- ii) *A Treatise on Letting Zen to Flourish to Perfect the State* (興禪護國論)  
Translated by TOKIWA Gishin
- iii) *The Universal Recommendation of Zazen* (普勸坐禪儀)  
Translated by YOSHIDA Osamu
- iv) *Aduice on the Practice of Zazen* (坐禪用心記)  
Translated by Steven Heine

B5 変形版 定価 5,500 円

Here, I re-examined the following two questions: (1) Whether the word “netti” in the *Peṭakopadesa* indicates the *Nettipakaraṇa*. (2) Whether the word “netti” in the *Peṭakopadesa* and the *Nettipakaraṇa* is a [common] noun or a proper noun.

My conclusion is as follows: The word “netti” in the *Peṭakopadesa* means “sāsanassa pariyetṭhi” (investigation of the teaching), without indicating the *Nettipakaraṇa* as a text. Therefore, the claim of Arabinda Barua is not upheld. The word “netti” should be considered a [common] noun as long as “sāsanassa pariyetṭhi” is meant. However, there is a possibility that the group of verses which described a summary of “sāsanassa pariyetṭhi” was called “netti”. In this regard, the word “netti” may be a proper noun. Therefore, one revision is necessary to the position of Bhikkhu Ñāṇamoli.

## 75. A Study on the Ascetic Practices of Commandments, Concentration and Wisdom

Jongnam CHOI

Many types of ascetic practices for driving away worldly passions and attaining spiritual awakening are described in Buddhist scriptures. One of them is the Three Learnings preached to bhikkhus and Ānanda.

The Three Learnings is explained in detail in the Āgama, Vinaya, and Hīnayāna and Mahāyāna scriptures. However, some versions of Hīnayāna and Mahāyāna scriptures describe the method of practicing the Three Learnings in different ways.

The *Samyutta Nikāya*, *Abhidharmasamgītiparyāyapādaśāstra*, *Mahāsāṃghika gīnaya*, *Yogācārabhūmi*, etc. mention the observance of commandments and the maintenance of the *pratimokṣasaṃvara* as the practice of commandments, the performance of four meditations as the practice of concentration, and the understanding of the fourfold noble truth as the practice of wisdom.

However, the *Cūlavedalla Sutta* of the *Majjhima Nikāya*, *Vimuttimaggā*, etc. mention the performance of the eightfold holy path as the practice of the Three Learnings, and the *Samdhinirmocana Sūtra*, *Mahāyānasūtrālaṃkāra*,

etc. mention the Six Pāramitās as the practice of the Three Learnings.

In addition, many Buddhist scriptures describe obstacles to practicing the Three Learnings and stages and results attained through the practice the Three Learnings slightly differently.

Because they established the methods of practicing the Three Learnings, obstacles to the practice, stages, etc. differently according to the age of composition of the texts and the sect to which they belong, opinions suggested in these scriptures are various.

## 76. An Investigation into the Formation Theory of Kṣānti in Nirvedha-bhāgiya

Jou-han CHOU

The Ābhidharmika Ghoṣaka, while highlighting the distinction between those who have attained the “peak state” (*mūrdhan-lābhin*) and those who abide in the peak (*mūrdhan-vihārin*) coined the term “forbearance” (*kṣānti*) for the “peak state” (*mūrdhan*) connected with non-retrogression. Therefore it becomes the first instance in which the *kṣānti* of the virtuous root of non-retrogression is established for the first time.

Persons with middling capacity and the sage can benefit from “not falling to undesirable transmigrations (*anapāyaga*)”; however, the mediocre person acquires the way of not falling to undesirable transmigration (*aparihāṇa-dharma*) by attaining the forbearance virtuous root (*kṣānti-kuśalamūla*) whereas the sage acquires the same *aparihāṇa-dharma* through attaining forbearance and the wisdom of the law of suffering (*duḥkhadharma-jñāna-kṣānti*).

Regarding the “peak” of bodhisattva-dharma, it can be explained in the three terms: “peak”, “the seat of bodhisattva” (*bodhisattvanyāma*), and “resting the mind in no generation and no annihilation” (*anutpattika-dharma-kṣānti*). The relation between the first two is that of “the precursor and successor” while the latter two are one and the same. Those who have attained the “peak state” may backslide whereas those who abide in the “peak” will never fall back.